

平成 21 年 6 月 20 日現在

研究種目：基盤研究 B

研究期間：平成 18 年～平成 20 年

課題番号：18300310

研究課題名（和文） 三次元計測技術を用いた新羅王陵石像彫刻の総合的比較研究

研究課題名（英文） A comparative study of stone sculptures in Imperial Tombs of the Silla Dynasty by using three-dimensional measurement

研究代表者 木下 亘

研究成果の概要：韓国・慶州市とその近郊に所在する新羅王陵には、多種多様な石像彫刻が配置されており、その様式は中国陵墓の強い影響を受け、それに独自の要素を加味し成立したものと考えられている。本研究では、先ず新羅王陵の幾つかに見られる石像彫刻並びに墳丘外護列石の十二支像レリーフを対象としレーザーによる三次元計測を行った。墳丘に至る神道を挟んで、華表・武人・文官・獅子・亀趺等が配置されている。調査は新羅王陵の内、石像彫刻が存在する古墳を対象とした。調査を実施した古墳は眞徳王陵・武烈王陵・聖徳王陵・景德王陵・元聖王陵・憲徳王陵・興徳王陵の各古墳である。さらにこれら新羅王陵と関連する資料として、ほぼ同時期に築造された古墳、或いは当該時期に製作された石塔、燈籠、浮屠等に見られる十二支像レリーフを三次元計測し、比較材料として資料の蓄積を計った。調査対象としたのは九政洞方形墳、遠願寺址東西三層層石塔（慶州市外東邑毛火里山 8-2）、太和寺址浮屠（蔚山廣域市中區鶴城洞 67）、陵旨塔（慶尚北道慶州市排盤洞 621-1）、開心寺址五層石塔（慶尚北道慶州市醴泉邑南本里 200）、縣一洞三層石塔（慶尚北道英陽郡英陽邑縣一里 398-5）、慶州校洞石燈（慶尚北道慶州市校洞）、臨河洞十二支三層石塔（慶尚北道安東市臨河面臨河里 794）、琴韶洞三層石塔（慶尚北道安東市臨河面琴韶里 560）、化川洞三層石塔（慶尚北道英陽郡英陽邑化川里 835）、華嚴寺西五層石塔（全羅南道求禮郡華嚴寺）の石塔及び浮屠である。

これらの三次元画像のデータ資料は、日本へ持ち帰った後、画像処理をおこない、データの蓄積を計った。更にそれらの画像資料を基とし、実際のレリーフの中には、風化や汚れのためその細部が判別しにくくなっている事例が含まれるため、それらの画像資料を基に再度現地にて確認・校正作業を行った。それと共に、各地域の博物館や大学収蔵されている類似資料にも目を向け、これらの実測調査も同時に行った。九政洞方形墳隅柱石、石函、滑石製十二支像等の資料についても計測を行いデータの集積を計った。

また、石像彫刻の内、特に武人像や文官像には、顔立ちや衣装或いは持物に、顕著な西域的要素が認められる事、更に、石像物の中には連珠文などペルシア或いはソグド美術と深い関係が考えられる事などを考慮し、中国西域地域の類例調査を実施した。現地調査を実施した地域は、新疆・烏魯木齊、喀什、和田、民豊、庫車、吐魯番の各地域の博物館並びに石窟寺院である。特に陶俑に見られる人物、衣装等の表現に注目し、新羅石像武人像に見られる表現との比較を行った。これにより顔立ちなどの表現は勿論、衣装に見られるボシエットなどの持物についても関連する部分が多い事が判明した。更に石窟寺院に見られる壁画の中から、連珠文関係の資料を収集した。国立慶州博物館が所蔵する連珠文石像物は、文様としては樹

木、獅子、孔雀などモチーフが使われており、類似する部分が多く認められる。しかし文様構成に目を向けると中心に見られる樹木を挟み左右対称な事例が多いのに反し、左右秘対称性など韓半島で変容、構成されたと見られる部分が存在している点が指摘出来た。

これらのモチーフが韓半島、特に新羅の地域でどのように受容され、そして変容していったのかを具体的に知る材料が得られたと考える。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	5300000	1590000	6890000
平成19年度	5100000	1530000	6630000
平成20年度	3000000	900000	3900000
年度			
年度			
総計	13400000	4020000	17420000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：新羅王陵・十二支像・西域・武人像・文官像・亀趺・華表・石塔・浮屠・連珠文

### 1. 研究開始当初の背景

韓国・慶州市とその近郊に所在する新羅王陵の幾つかには、墳丘に連なる神道を挟み多種多様な石像彫刻が配置されている事は、良く知られている。その様式は中国陵墓の強い影響を受け、それに新羅独自の要素を加味し成立・発展したものと考えられている。

新羅王陵を始めとする各種の石像物には、十二支像や武人、文官・獅子と言った石像彫刻が数多く認められる。これらに関しては、従来同一縮尺による実測図が作成されて居らず比較研究に大きな困難を伴っていた。よって、新しく開発された三次元計測技術を使い、これらの石像物の同一視点での実測を試み、比較研究を容易にする事を第一の目標に定めた。また、これら王陵に関連する資料に関しても随時、資料収集を行う事とし、データベース化を計った。この手法を用いた実測により各石像の比較研究が極めて容易になるものと予測された。

### 2. 研究の目的

統一新羅期の古墳や石塔に見られる石像彫刻は、古くから良く知られているにも関わらず、その正確な実測調査はなされていなかった。今回はレーザーによる三次元計測を行いこれらの精緻な比較を行い、その出自や地域的な特色、時代的な変遷過程を明らかにする事を目的に実施した。これらの作業を通じて、新羅に於いて中国陵墓の影響がどのような形で導入されるのか、また、新羅においてどのように変容するのかを配置された石造彫

刻を通して明らかにするものである。

また、石像彫刻の見られる西域的な要素を抽出し、それらの出自を求めた。文様構成など西域に見られるものと比較する事により、新羅の西域文化受容に対して、どのような在り方が見られるのかを明らかにした。

### 3. 研究の方法

慶州を中心に分布する新羅古墳並びに関連する石像彫刻のリストを作成し、これに基づきレーザーによる三次元計測を実施した。石材の風化や劣化のため、本来の文様が判別しにくい部分に関しては、三次元画像データに肉眼観察結果を加えることで、実測図を完成させた。これらの成果を基礎として図像相互の比較を考古分野、美術分野から行い、その出自や発展・展開のあり方、地域的な特色などを明らかにした。また、新羅古墳の石像彫刻に見られる西域的要素が何処にその出自を求めうるのか明らかにすべく、東トルキスタン地域の石窟寺院或いは博物館収蔵資料を中心に資料調査を行った。

### 4. 研究成果

石像彫刻などが認められる各古墳及び同時期の関連する石塔等のレリーフを悉皆的に実測調査し、その諸特徴を把握し比較を行った。この結果、先ず十二支像に関しては、美術史的な図像変遷について写実的なものから形骸化したものへ、というその変遷を知る事が出来た。考古学的には厚みがあり、より立体的な浮き彫りから板状のもの、線

彫りのものへの形式変遷が推定できるようになってきた。これは決して現在比定されている王陵の変遷と対比出来るものではない。亀趺の変遷についてもその形態変遷をほぼ明らかにする事が出来た。しかし形式的に見て、古墳と年代的に符号しない事例も見られ、碑石の設置時期などを再考する必要も生じている。

また、石造物の各所に見られる西域的な要素は、新羅の古墳文化を考える上でも重要な視点である。連珠文石造物の如く、新羅へ受容された時点で変容したと考えられるものも見られ、新羅の西域文化受容が選択的受容であった事を具体的に示す事例と考えられた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

木下 亘 「三次元計測技術を用いた新羅石像彫刻の総合的比較研究—平成 18 年度成果報告—」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究 第 14 回』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 金沢大学 p 11～p 14 2007

宮下佐江子 「韓国新羅王陵石像物のトルクについて」『古代オリエント博物館紀要 28』p70～p80 2009

関丙勲 「慶州統一新羅時代の石彫像にみられる西域的要素」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究 第 14 回』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 金沢大学 p15～p20

権江美 「統一新羅期に於ける石製獅子像の起源に就いて」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究 第 14 回』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 金沢大学 p21～p24

[学会発表] (計 4 件)

木下 亘 「海を渡った列島の文物」八尾市立歴史民俗資料館講演会 2008

木下 亘 「日本列島出土の角杯について」MIHO MUSEUM 国際シンポジウム 2009

宮下佐江子 「新羅、西アジアと出会う」国立済州博物館講演会 2008

宮下佐江子 「新羅王陵石像物の服飾品の西方的要素」MIHO MUSEUM 国際シンポジウム 2009

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

取得状況 (計 件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木下 亘 (奈良県立橿原考古学研究所総務企画部研究員)

### (2) 研究分担者

ト部行弘 (奈良県立橿原考古学研究所附属博物館総括学芸員)

清水昭博 (奈良県立橿原考古学研究所埋蔵文化財部主任研究員)

鈴木裕明 (奈良県立橿原考古学研究所埋蔵文化財部主任研究員)

井上主税 (奈良県立橿原考古学研究所埋蔵文化財部嘱託)

宮下佐江子 (古代オリエント博物館学芸課長)

郭東錫 (国立中央博物館美術部長)

関丙勲 (国立中央博物館亜細亜部長)

関丙贊 (国立中央博物館美術部学芸研究官)

陳政煥 (国立慶州博物館学芸研究士)

権江美 (国立中央博物館美術部学芸研究士)

### (3) 連携研究者

篠原啓方 (関西大学文化交渉学教育研究拠点)